

一遍聖絵の成立と中世律宗

瀬谷 愛（東京国立博物館）

国宝「一遍聖絵」（以下、「聖絵」）は、時宗開祖一遍の十回忌にあたる正安元年（1299）に、その生涯を全国各地の風景のなかに描き出した日本美術を代表する絵巻である。これまでに膨大な研究が蓄積されてきたが、最も重要な場面である文永11年（1274）熊野本宮での「一人の僧（律僧）」による念仏札拒否は、「時宗と律宗の競合」と解釈され、律宗を「聖絵」研究から遠ざけてきた。本発表では改めて編者聖戒（1323没）の視点から考察を始め、作品成立に東大寺戒壇院凝然（1240～1321）を中心とする中世律宗が関与したこと、京都における中世律宗の拠点であった東山太子堂で「聖絵」や同時代絵画が制作されたことなどの可能性を提示したい。

「聖絵」に描かれる一遍の遊行先は、その多くが律宗の活動拠点と重複する。文永11年、十重禁戒を受け、初めて賦算を行なった四天王寺は、叡尊や忍性が別当に任ぜられた律宗の重要拠点であった。ここで一遍は弘安9年（1286）に舍利を出現させるが、前年には叡尊が同じ奇瑞を起こしている。また、大隅正八幡宮、大三島神社、美作国一宮など各国一宮への参詣は、弘安7年に出された諸国国分寺一宮興行令を承けた叡尊ら西大寺系律宗による再興事業を意識して採録されたものと解釈できる。さらに叡尊が蒙古降伏の修法などのために度々訪れた石清水八幡宮への参詣など、全編を通して中世律宗を意識した事跡を挙げる事ができる。

また、文永11年に遊行へ向かう一遍と聖戒が伊予国桜井で今生の別れをした事跡は、西大寺系律宗の拠点であった伊予国分寺での聖戒自身の活動を示唆する。聖戒はやがて、瀬戸内における律宗の拠点や伊予念仏道場での活動を通して、同族である越智氏出身の凝然をよく知るようになり、石清水八幡宮を経て、京都へと進出したのではないだろうか。全国展開した一遍の活動と聖戒による「聖絵」の成立は、蒙古襲来という社会状況下における「越智河野氏」の出自、律宗を通じた土御門家（宮廷）とのつながり、一遍と聖戒の律僧的側面に支えられていたと考えられる。

さらに、この伝記を絹本を用いた宋画風の絵巻に仕上げた工房について、本発表では京都において天台、南都、関東をつなぐ中世律宗の拠点であった東山太子堂（白毫寺／速成就院）を想定する。太子堂は西大寺系律宗を中心として、仏画・仏具の斡旋や律僧の滞在所としても機能した。「応永頃ノ古図写」（白毫寺所蔵）によれば、その寺域は青蓮院、祇園社、知恩院に隣接する広大なもので、一角に本願寺があった。太子堂長老が祇園社大勧進を兼務したことを考慮すれば、太子堂を拠点とする工房が、「東山絵師」の拠点、あるいは後の「祇園社絵所」となり、宮廷の絵所とは異なる絵画制作を受注、流通する場であった可能性が浮上する。発表では、「聖徳太子二歳像」、「聖徳太子絵伝」、「宝珠台」（海住山寺所蔵）他、「聖絵」前後に制作された関連作品についても併せて考察したい。